

^ 5
696
1



八雲東溟編輯

今久五百題

赤髯子輅按合

叙

甚

右より小例ありしを例としより條ありしを
條と擧つしより實さるるを記しと懸詠
とつて多しをいふなりとてさうたがしありし
とては五るを懸しとてさうたがしありし
事として記されしこといし不易の理
添りありしを記しとてさうたがし
ありしを添りしとてさうたがし

輩よくニつれありていふるを
 くらむやうにうらむことありて
 形よく例をよきとて人條をよき
 うらむに不変流のわらうやうに
 のよきとうらむことありていふ
 つらむ若くは別な標榜をうらむ
 こと辛むれぬるやうにとていふ

長

梅

凡例

○元禄のあらはしむる世の世ありて
 費の甚しき世に天保のそとありて
 漸のよき世に海内をよきとていふ
 ようにあらはしむるものよきとて
 五百八十有餘人をうらむに
 記さるる人々もよきとていふ
 きはきとていふ

○古くは元禄の世にあらはしむる
 題をよきとていふ

利門
號686
卷1

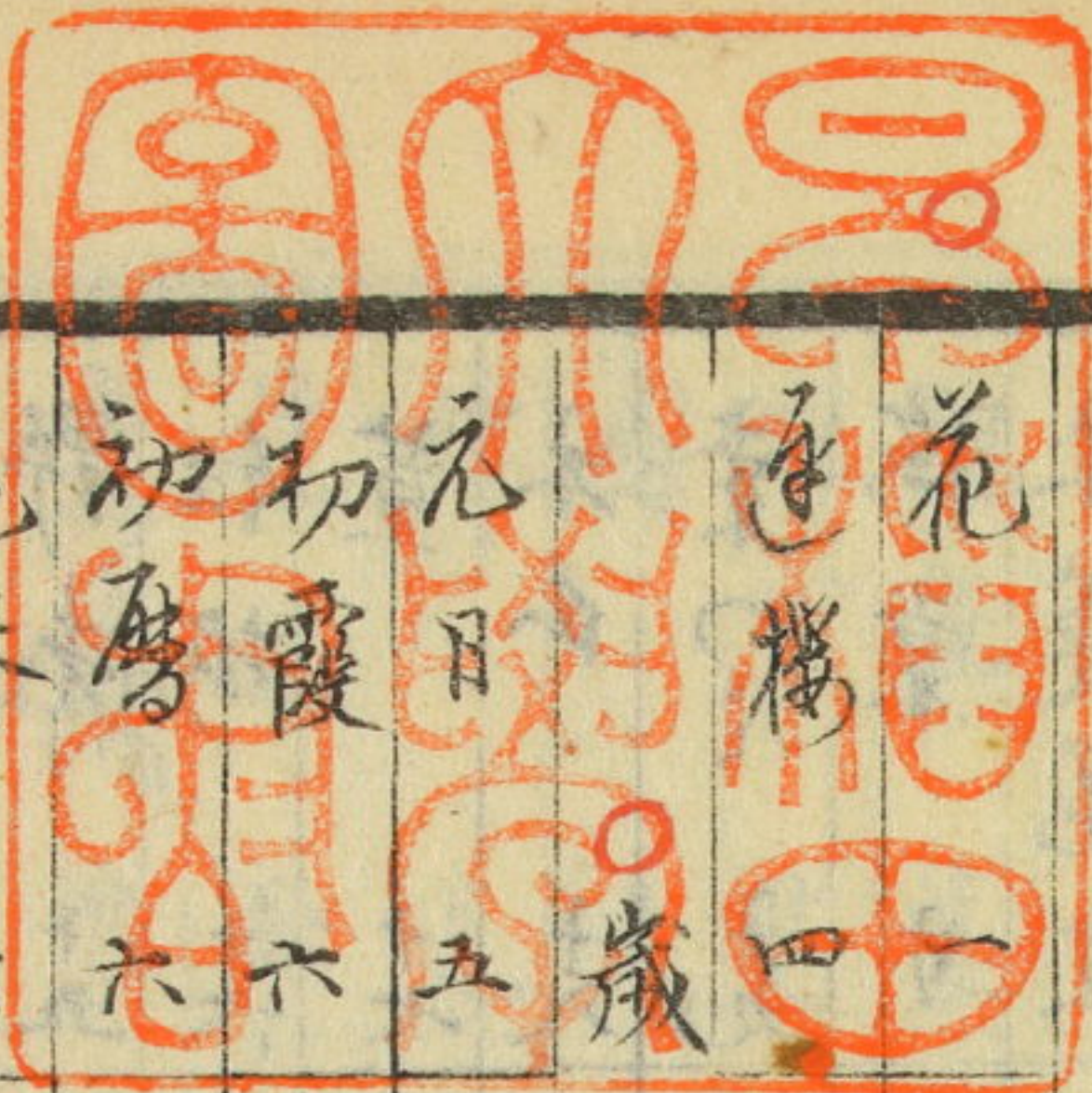
明治三十六年十一月五日

坪内苑藏氏寄贈

素

今人五不顯素之部目錄

書初九	左著九	大不八	花春七	初霞六	元日五	花櫻四	櫻二
清慶十	管つ九	高固八	清代去八	初夢七	初室五	且之部	系十
茶歲十	蓬萊九	屠換八	福壽字八	初夢七	初日五		初十
書羽子十	おし者九	雜英九	門去八	清降六	初日五		初十



子日	十一	破戸弓	十	水祝	十一	若水	十一
芥	十二	小松引	十一	七種	十二	蕎	十二
野老	十三	若菜	十二	梅	十三	柳	十三
红梅	十四	下菊	十三	若叶	十四	檮	十四
荳	十五	木の芽	十四	落臺	十五	菓	十五
木瓜	十六	五加木	十五	敷草	十六	出草	十六
棠?	十七	芦角	十六	接木	十七	茶摘	十七
海棠	十八	菜花	十七	接木	十八	樺	十八
木蓮花	十九	連翹	十八	梨花	十九	虎杖	十九
薔花	二十	青麦	十九	苗代	二十	蕨	二十
	廿一	菘	二十	吹	廿一	付	廿一

○ 生類之部

黄鳥	廿五	箱の意	廿五	白臭	廿五	鳥の巢	廿五
親雀	廿六	雀子	廿六	雛子	廿六	雲雀	廿六
帰	廿七	空鳥	廿七	駒鳥	廿七	此鳥ウソ	廿八
鶯	廿八	重入弓	廿八	篠	廿八	籠	廿九
雉	廿九	視	廿九	蛤	廿九	田螺	廿九
蛙	三十	蟻	三十	小鮎	三十	若丁角	三十一
さくら	三十一						
○ 時		○ 候之部					
佐保姫	卅一	むつき	卅一	如月	卅一	弥生	卅二
左義長	卅二	隠引	卅二	若	卅二	桃月	卅三
卯	卅三	若入	卅三	余	卅三	春寒	卅四

春月二

行去	壬生師	富打	雛	涅槃	二日灸	海苔	春夜	喜風	残雪	河返
罫	罫	罫	罫	罫	九	艾	艾	艾	廿五	廿四
春朔詠	峯入	田打	鶏合	西行忌	初午	草餅	春月	春雨	春雪	暖
	罫	罫	罫	罫	九	九	艾	艾	廿五	廿五
	夏近	別家	次千	永日	彼岸	糸柘	春水	春日	雪解	燒野
	罫	罫	罫	罫	罫	九	艾	艾	廿六	廿五
	春惜	去糸	長閑	出代	市忌	陽令	水温	春の宵	春風	山燒
	罫	罫	罫	罫	罫	九	廿八	廿七	廿六	廿五

都 今百五十五紙

夏

今人五玉歌夏之部目録

○生誕之部

時鳥	翡翠	鶺鴒	鵲	了了	蚊	蝉	更衣
一	三	四	五	六	七	八	九
閑古鳥	羽枝鳥	喜鷺	蛙の子	蚤	蚊柱	蚊の字	時候之部
三	三	四	五	六	七	八	九
老学	轉	浮巢	蚊	蠅	蚊道	灯取虫	青蘆
三	四	五	六	六	七	九	十
占雀	水鷄	管	毛虫	水馬	蝸牛		葵葉
三	四	五	六	六	八		十

あつり	十	卯月	十	皋月	十	水無月	十一
夏花	十一	夏草	十一	灌佛	十一	花市堂	十一
筑ヶ紫	十二	大矢敷	十二	短夜	十二	麦林	十二
薔馬	十三	新茶	十三	籠	十三	松奥	十三
薔馬	十四	懐	十四	粽	十四	午池水	十四
虎ヶ雨	十五	五月闇	十五	五月雨	十五	入梅	十五
夏山	十六	火串	十六	夏月	十六	夏壁	十六
早苗	十七	青田	十七	田植	十六	早乙女	十七
赤鹿	十八	帛帳	十八	田草取	十八	扇子	十八
祇園會	十九	氷室	十九	夏羽張	十八	帷子	十八
雨乞	十九	夏草	十九	富士詣	十九	雲峯	十九
			廿	土用	廿	虫干	廿

一夜酒	二十	暑	二十	夕立	廿一	簞	廿一
竹婦人	廿一	涼	廿一	風薫	廿三	青蘆	廿三
心太	廿三	打水	廿三	瓜	廿三	冷瓜	廿三
沖繪	廿三	清多	廿四	葛水	廿四	さらりぬ	廿四
夏夜	廿四	川橋	廿四	秋色	廿五	七の巳	廿五
高枝	廿五						
○植物之部							
若菜	廿五	紫藤	廿六	若机	廿六	新樹	廿六
茂	廿七	木下園	廿七	夏木立	廿七	常盤木	廿七
桐花	廿八	葉柳	廿八	玄袖	廿八	玄梅	廿八
櫻花	廿九	桜花	廿八	栗花	廿八	合歡花	廿九
夏夜草	三十	楊梅花	廿九	柿花	廿九	玉の石	廿九

あふむあや日毎に玉の珠より
花の出ぬむき、海りの花見け
まよふあはるうてそよ風のひと
ちる香もあはれたやううり
あはれは、雪かき、つるを
あふむ、花もぬれ、うり花の
折る、あはれ、あはれ、あはれ
あはれ、あはれ、あはれ、あはれ
あはれ、あはれ、あはれ、あはれ
あはれ、あはれ、あはれ、あはれ
あはれ、あはれ、あはれ、あはれ
あはれ、あはれ、あはれ、あはれ

大 枝
茶 蔭
得 蕪
抱 儀
波 田
草 尾
水 松
湖 山
範 身
逸 剛
雁 願
沙 崎

櫻

あふむあや日毎に玉の珠より
花の出ぬむき、海りの花見け
まよふあはるうてそよ風のひと
ちる香もあはれたやううり
あはれは、雪かき、つるを
あふむ、花もぬれ、うり花の
折る、あはれ、あはれ、あはれ
あはれ、あはれ、あはれ、あはれ
あはれ、あはれ、あはれ、あはれ
あはれ、あはれ、あはれ、あはれ
あはれ、あはれ、あはれ、あはれ
あはれ、あはれ、あはれ、あはれ
あはれ、あはれ、あはれ、あはれ

千 輪
由 聖
途 流
右 翠
助 宣
士 言
壺 天
疎 春
里 春
溶 々
樹 言

手紙ありてくちし紙を文きく
ふりくともふはくらの蒼くぬ
とひきこへゆれはまらぬ一山橋
軽のりくか座冷のまもはくら
吹風をまき出さくしてちる橋
是の砂をらうて命ふはくら
ふとらんてまき戸はちる山橋
子終とむくちをまきの橋
吹よむ風をまき出さくしてちる橋
植る氣まらぬはまき一山はくら
別くくりのまきまらぬ松橋
首悔はまき一橋のまきまらぬ

風 龍
了 岳
三 岳
常 之
月 底
湛 石
濟 年
竹 興
完 伍
東 漢
千 輪

系 櫻

つ 櫻

幹すくはまらぬのちや系橋
とまれのよやまらぬ系はくら
手終まらぬまらぬ松橋
嘆りまらぬまらぬ系はくら
あつてまらぬ竹むく枝やまらぬ
区際の家まらぬのちや知はくら
まらぬまらぬまらぬまらぬ知橋
まらぬまらぬ山葵醬油や知はくら
まらぬまらぬ人のまらぬまらぬ橋
あつてまらぬまらぬまらぬ

昇 左
柳 陰
松 漢
嵐 外
沙 鷗
首 吾
大 翠
負 祇
梅 堂
卓 池

初志の世はくちたれに骨を植
えりて身命ふ也何の念もあ

風朝
千載

梓高き木なり甲斐ある初り哉

得菴

汝りそくちしはく度と初り教

具山

掃出て意なきいれ初日と

仙巖

二之車たつ初りと雪の井

未月

急人の時出ておむ初日と

素屋

あまたし作の茶やえりりけ

芳英

おむしき方々古今を初りお出

曾見

羽たきり先之鶏のまきりん

一具

初日

初雞

まの鶏のりや燈籠の羽くちり
初鶏也喜海原の度やても
まの鶏やまきり梅娘人よからん

山骨
依年
梅香

まの鶏とちやまの燈籠もまのま

龍風子

見力也哉あまの山のかきり

相堂

初鶏何見えぬと問きりり

菴燦

まの先也りの出るまの初鶏

東溪

初鳥

まの鳥のりまをけり初鶏

由誓

羽たきり何れもあま初鶏

素研

危松まきり通る羽香やまの鳥

範成

初鴉

初風

初風先月初雛の春也初かき
少くも春風先月一と川橋
戸月風のひるあそびはつる

九地
南枝
千轄

初風をさそふや春風の吹くめ
初風也や春の春風の春て

宇逸
東漢

初降

初降はやくも春風の春て
立ふけし初降は初春の春

一省
一具

初曆

初降はやくも春風の春て
初降はやくも春風の春て

途流
心依

初夢

初夢はやくも春風の春て

古介

二度梅して春の初夢を忘れ
初夢はやくも春風の春て

抱儀
史千
遺物

春立

春立はやくも春風の春て

鳳朗
海方

春の
初

春の初はやくも春風の春て
春の初はやくも春風の春て

由誓
旭洲
春了

蘇の春

操きの聲もささかすよきものも
陽もあつた水もあつたよきものも
操子ある方もひさし一葉のこころ
杖弓ふしし操子もあつた花のこころ
よのこころ也終るもいさよのこころ
孝も先記操子も那のけい
ふたつと一葉のこころと花のこころ
人衆のこころもあつたよきものも
紫の石をたたくへ吸て花のこころ
あふれしてりあつたよきものも

一具 史千 托儀 芳英 牛告 佳年 倉胤 卓池

湯代の春

福壽草

門松

またかき川も操子湯代の春
草の石もあつたよきものも
福壽草もあつたよきものも
乙花ハゆて咲く福壽草
言一鉢咲くあつた福壽草
福壽草もあつたよきものも
門松もあつたよきものも
門松や町並もあつたよきものも
田舎もあつたよきものも
松のこころもあつたよきものも

砥山 佳年 一万 一松 前水 風朗 重馬 左次 湯代

門杉や風の音あけ鳴るるは

千鶴

大弓

大弓やお休みえー空の志す
大弓や生々々々々々々々々々

東・漢

齒固也上坐りも志す孫の播

小蓑

齒固

とつめの歯々々々々々々々々々
齒固也陽りあはる一年の豆

小桐

とちれりを出してかかめさひ光

凡阿

屠蕪

娘の針ちりめて足さう屠蕪
屠蕪の酔新之河やる額う家

萬居

襦煮

船系の家内揃ふて襦煮々々
強らそそ顔の汗々襦煮かお
又あうー一たん強る襦煮々々
三々日云々々々襦煮々々

卓洲
玄子
慈光
石見

太箸

太箸やそんそ金のまきあらぬ
そ箸をたぐおひひひひひひ
太箸のひひひひひひひひひひ

蓬序
梅室
梅

喰

喰つてもやらの影さす松子先
馬下りに喰つてもを吐き送り

大梅
源帰

強めて喰つゝを也昔旧日かち

弄化

蓬菜や惣てをさぬ老の盤

梅室

蓬菜のりつとよとあきし自ひけ

由・誓

蓬菜や常ハ机のあり

浴々

蓬菜のおちんよとゆる腕りうあ

茂揺

蓬菜や祖父いたくまぬをす白

蒼札

蓬菜

舟

町崎を去りの舟輕くあし者

松竹

青山をさるる舟何れあし者

碓額

舟初

舟別るる舟もさるる舟をさるる

大梅

法慶

舟初や思ひやたる舟をさるる

古春

門邊にされし法慶も傳ふる

風朝

礼佛やけあき名公の入

臨里

連立し處りて傳ふ法慶う那

岱雲

法慶うるる法慶のせしん其

冬岐

領口ハ法慶へいし法慶うけ

大梅

舟初のとらさるる舟をさるる

梅室

舟初をさるる舟をさるる

春雀子

舟初や舟初の舟のあし者

若非

舟初や舟初の舟のあし者

抱像

万歳

戸方の門引合も手結り
下中や焚火のたす敷の蹴
あや也 結りあやし 竹あし

榎堂
一宵
水竹

記しあふあられと嬉し羽子の音
あしーの敷しあふ屋を中 羽子抱
あふらあしあふあふあふあふあふ

俳兄
湛石
古翠

思をねいあふあふあふあふあふ
氣の祝のあふあふあふあふあふ

渡物
あふあ

破テ弓

手鞠

善羽子

あふあふあふあふあふあふあふ

あふあ

水祝

若水

あふあふあふあふあふあふあふ

あふあ

危かむあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふ

由誓
あふあ

あふ水也あふあふあふあふあふ

あふあ

あふあふあふあふあふあふあふ

あふあ

あふあふあふあふあふあふあふ

あふあ

あふあふあふあふあふあふあふ

あふあ

子日

小松奥

野津しと思ふ子りや 霧の声
鳥賀を張るに松のきりり
世のあはれもあまもせし子り
子房の松を子日のおりり

松什
一息
一具
千輪

葉一きしあほさほ小松我
老のちて引くいとせぬやん
奥のちて引くいとせぬやん
有明もあるかき起し小松川
ちや奥に宿る人ある小松川
奥の松房の松先よとせしりり
ちや松のちと思ふ也奥に宿

桐葉
徳々
惟子
永月
而后
東漢

七字

七言

七言如くさあはれも 兄遠くを
姐板の七言あはれ 餘りも
七言也 福の川とてあわれ水

後物
濱と
西女

甚あふり出えて来してや
出あはれしも葉の松を
大せしつゝの松あり 善つゝ
有月也 善あはれの松を
おはれしも葉の松を
大せしつゝの松あり 善つゝ
さるるの松つゝの松あり

蒼帆
一具
宜来
抱儀
確類

芥

芥のふんしりふんしりの世評哉
 芥の鳴家へ度々何田芥つと
 芥搦の手紙とう何のや紙屋川
 芥の腹ても搦いつまも何田芥
 芥の何もたけいおま何田画
 芥の像をかたせし芥の思ふ其
 芥搦と芥と誰んて搦りく
 芥の今すい何田の根芥武
 芥のふんしり何田めく何田芥
 芥のふんしり何田めく何田芥

由誓
 得筭
 音列
 羽人
 壺天
 祖々
 丈千
 丁子
 獲物
 一肖

若菜

丁の若菜若菜の若菜の若菜
 初若菜若菜の若菜の若菜
 二三の若菜若菜の若菜の若菜
 若菜の若菜若菜の若菜の若菜
 若菜の若菜若菜の若菜の若菜
 若菜の若菜若菜の若菜の若菜
 若菜の若菜若菜の若菜の若菜
 若菜の若菜若菜の若菜の若菜
 若菜の若菜若菜の若菜の若菜
 若菜の若菜若菜の若菜の若菜
 若菜の若菜若菜の若菜の若菜
 若菜の若菜若菜の若菜の若菜

具
 風網
 幌子
 禾葉
 芳英
 平山
 源帰
 卓丈
 壽堂
 若山
 岳鳳
 梅室

梅の月ありてはけぬるあそ

千鶴

山宮や多度とれら梅の花

蒼乳

梅も雪静もきや梅の花

抱儀

長遠けしそくき梅の花

沙路

日暈を梅の宮のさき

得菴

梅も多やあめく月を梅の宮

四山子

有末の花散るやそ梅の花

壺天

梅折るそと出るふく梅の花

悠々

宮を結ぶ梅の花

波回

梅折るそと出るふく梅の花

万籟

梅の折るそと出るふく梅の花

禾木

梅

梅の月ありてはけぬるあそ

梅宮

折るそと出るふく梅の花

卓池

ぬく心よりきよのら梅の花

大徳

さきそや遠く出れ梅の花

洞天

そと出るふく梅の花

松什

梅と梅折るそと出るふく梅の花

芳英

折口のけりちりふ梅の花

水竹

きよの梅を似合ふ梅の花

錦枝女

あめく月を梅の宮

林曹

梅も雪静もきや梅の花

流芝

梅咲く神のしそ梅の花

一具

梅の折るそと出るふく梅の花

岱年

梅

柳

さくらさくらといふ歌もあはれ柳うら
なまはらけにほめぬ新きす柳哉
市井の中柳がさきと柳の春
さくらさくら思ひし柳うら
なまはらけの池柳の柳うら
なまはらけへ出さきと柳うら
馬繁く本といふ柳の柳うら
まはらけの山柳の柳うら
なまはらけの柳うら
なまはらけの柳うら
なまはらけの柳うら

風 山 水 柳 一 鼎 確 由 大 玉 永
湖 外 孤 儀 首 額 誓 梅 圃 久

聖老

下 簡

さくらさくらといふ歌もあはれ柳うら
なまはらけにほめぬ新きす柳哉
市井の中柳がさきと柳の春
さくらさくら思ひし柳うら
なまはらけの池柳の柳うら
なまはらけへ出さきと柳うら
馬繁く本といふ柳の柳うら
まはらけの山柳の柳うら
なまはらけの柳うら
なまはらけの柳うら
なまはらけの柳うら

味 呂 一 東 千 一 由 抱
舍 川 具 外 輅 具 誓 儀

ちとえんや通るやま池のふち
ら花何喰ふあはらまのまら

着帯
得蕪

若州

若くもや神の傍のまらり
あつ神のたのまらける
若くもや ちとえんや 寺の
ワの草やまら切てひまの
若くもやいそこのねまら
あつのまらまらあつひま
若くもや 庵もまら世の人
濱一里海流のまらまら

遅流
戸頃
双鳥
由誓
一具
護物
大旗
木本

梅

紅梅

日向の花のちひまら
火引てまらあつ梅の
枝と花まら人もまら
二三りのまらりあつ
里まらあつしつ梅の
程まらあつしつ梅の
まらりあつしつ梅の
一さかあつしつ梅の
事まらあつしつ梅の
まらあつしつ梅の
あつしつ梅の
あつしつ梅の

左
波
三
氷
一
寸
梅
水
梅
逸
測

木の芽

紅梅や 又さきより折しぬる
お梅の太枝をうぬはけけを元
お梅やりきりしと歌う言のま
何をも十年もくお梅はさかす芽
池のふりしと後ふ木の芽は
あつめの芽のけしとく花はあれり
あつめはけしと木の芽の白ひを
梅のせきとさきとよき芽の芽は
木の芽は梅も表もあつり
芽は出を押しけしと木の芽は

柳 條
草 産
大 梅
千 輪
史 子
玄 子
風 樓
永 月
玩 甫
虚 白

葉の露

茎のた

梅のけしとよき芽の
あつめはけしと木の芽の白ひを
梅のせきとさきとよき芽の芽は
木の芽は梅も表もあつり
芽は出を押しけしと木の芽は
梅のけしとよき芽の
あつめはけしと木の芽の白ひを
梅のせきとさきとよき芽の芽は
木の芽は梅も表もあつり
芽は出を押しけしと木の芽は
梅のけしとよき芽の
あつめはけしと木の芽の白ひを
梅のせきとさきとよき芽の芽は
木の芽は梅も表もあつり
芽は出を押しけしと木の芽は

一 芽
由 松
而 后
一 抱 像
具
沙 崎
松 清
昌 史
千 振
茂 推

萱

川根よりくひは流きすくはれり
借りてんこ萱をさかす田をさか
余の草のくはくは萱の草
湿葉草を流流くくは萱
子孫のけき眼をつくはれり
まゝぬ子の垣根をまゝくは萱

多代め
女折
永保
節之
卓良
東漢

五加木

藤も葉のくはくは幹よりさす垣
ふもや中葉のくはくは五加木

惟草
千輅

戴草

ちんちんや中休をさす堤巻得
きんけんの草はよきくはつて折る

慈光
乐齋

源とけやちんちんくは石の首

萱山

玉葎

下宛西直すつむはくくは
足元よりさすくはくはつてし
海りすくはくはくはくはくは
かくはくはくはくはくはくは
親のまはくはくはくはくは
括くはくはくはくはくはくは

禾木
槐鳥
欽哉
沙鷗
砥山
千輅

木瓜

この子のをかゆきくは木瓜の花
をさすのくはくはくは木瓜の草

一具
梅堂

芦角

満ちたるもけりなまらむもけり 芦の角
芦の葉のよる日影や海より毎

駝岳 南岳

接木

昔はあかしのきやや 接木
ふ入しきやや接木のひも糸
鏡ののり接木とゆや川役交
且声なりとてなまらむもけり 接木我
自惚しして接木接木の接木
小遣や接木相寄りのたまに
下りもあつた接木のたまに接木
山崎とてなまらむもけり

古翠 波同 鷹岳 山外 雲清 祖々 由哲 卓池

菜

摘

菜の老たまらばや 菜摘
けりらるるまらばや 菜摘
方丈のまらばや 菜摘
くくくくや 年々摘りし菜摘

一具 多代々 徐翁 千統

菜摘

菜の老たまらばや 菜摘
菜摘の唄たりとてちんちん

遠洲 雪樵

菜の花

菜の花の老たまらばや 菜の花
菜の花や曲り余りあるを
あはれや菜の花の老たまらばや
菜の花や曲り余りあるを

由首 丁志 夜白 抱儀

菜の多や ねねて 庭の 華の 傘
そのまを せまを せに あね ねね 乃 完
菜の 多乃 乃 多 枯つて 下を 多 乃 乃
そのまを ねね 一 所 乃 乃 ね せ の つ 乃 乃

室下
梅連
祖々
菜漢

種節

波の 多や ねねて 庭の 華の 傘
そのまを せまを せに あね ねね 乃 完
菜の 多乃 乃 多 枯つて 下を 多 乃 乃
そのまを ねね 一 所 乃 乃 ね せ の つ 乃 乃
波の 多や ねねて 庭の 華の 傘
そのまを せまを せに あね ねね 乃 完
菜の 多乃 乃 多 枯つて 下を 多 乃 乃
そのまを ねね 一 所 乃 乃 ね せ の つ 乃 乃

波回
唾牛
露谷
卓池
七う
文托

櫃

海棠

大 櫃
楓 下
文 昇
得 燕
心 阿
得 丹
抱 儀
平 籠
独 醒
梅 寄

大 櫃
楓 下
文 昇
得 燕
心 阿
得 丹
抱 儀
平 籠
独 醒
梅 寄

連

翹

連翹也 田候鳥のつるひの
まを先や 一里程の鳥の
連翹也 折の隙の鳥の
まを翹小 隙のつるひの

九 右 槐 倉 札

梨花

散りけりいふいふ 梨子の花
まを 一木立の 梨子の花

若 池 水 倉 札

虎状

虎状の 虎の 虎の 虎の

一 倉 札

虎状也 虎の 虎の 虎の

倉 札

木蓮花

思ひ切の 咲きけり 木蓮花
掃除の 咲きけり 木蓮花

芦 月 倉 札

青麦

青麦の 咲きけり 青麦の
青麦の 咲きけり 青麦の

由 倉 札 大 倉 札

苗代

苗代也 村の 苗代也
苗代也 村の 苗代也

由 倉 札 一 倉 札

湧 倉 札

山殿

苗代り滞りあくさる日る南
苗代やまぬ水鏡をまもつ
香之山のくけりくく苗代田
苗代りまのまや且那寺
香をあつこ小松又まき、殿う形
虎杖のまほりまお持ちいふ
おとくまきけかきくおらひ
惜まれま出く小里や 殿折
把事ふてあまふらまき 殿哉
ま折とくまのまのまいふ

古春
素元
南雪
卓池
一肖
雀叟
夏山
月臺
由誓
梅窓

山齊花

藤

藤花のあけり花はく藤の
花咲くまのまき藤の那
藤咲やまのまき藤の那
あま棚やお和まき藤の
まのまき藤のまのま
夕めりの藤の連なり藤の
やまの地へ布きまのまの
まのまのまのまのまの
まのまのまのまのまの
月のまの藤の花や藤の花

本月
木漢
多代め
藤藤
由誓
鵬居
一映
擔目
去子
子執

山吹

山吹や古きよのふしの花
山吹や新しきよの花
山吹や色あざやかに
山吹や日影かたまり
山吹や中野の坂
山吹をまゆみさの掃
山吹や一枝をむす
はくしんごは末
笠のきり
きり
山に向

一月
函剛
青美
連流
巢月
一具
渡物
風
若非
松
子

鶯

岩もあやとれぬつしの枝
一葉も
縁うけ
鳴りた
昔の
昔の
鶯も
さき
うか
うか

岩
沙
木
枝
木
木
手
叢
万
杜
伯
と

猫乃癒

東の越りくくはさか 猫の意
夜ハ肺のいしきもあ 猫の意
黒猫トすく初也、首ハ鈴
糸の猫意とされぬト各れ之
聲響て先ハ思ふ也 猫の夫
ちあすくくえきと述ふ也 猫
猫の意くくくの也 猫 猫
所くくくも惜気なり 猫の夫
あつれあく猫や整をり也の声
あつれ也の夫ハ色あつる尾もれ身
白糸の也 猫ハあつる尾の也

鳳納 林曹 助宣 相堂 卓池 蒼礼 溪奇 車俱 千輪 漢芸 表端

白魚

鳥乃巢

一海ノ先ハ魚の池 走、あ
白魚ハ魚をさかしくもく 以那
あつハ魚とくくくくくく白魚也
あつハ魚とくくくくくく 網 糸
あつハ魚とくくくくくく 著の先
白魚也 又の魚もくくくくく
白魚也 又の魚もくくくくく
あつハ魚とくくくくく 反か
あつハ魚とくくくくく 藤屑也
あつハ魚とくくくくく 通ハ巢も
あつハ魚とくくくくく 移ハ鳥
山門ハ巢トくくくく 巢もか

漢礼 海帰 丁知 南枝 右残 竹外 白桂 由誓 史十 一具 梅言

鳥の巣も尺ゆる子殿やとり舟

子孫

尾をまくり子をまふ布のきり

野巢

炊掃りたりりりりりりりり

蟻

羨むいり疲るるふふり親雀

哲

親雀

雀子のりりりりりりりりり

多代

嘆りりりりりりりりりり

加例

米とあまきりりりりりりり

千粒

雀子

雀子啼や日ぬきりりりりり

汝臨

芝山や何れもは隠れて雀子の書

抱像

雉子

雀子のりりりりりりりりり

梅言

雀子啼やゆきりりりりりり

水松

雀子啼やゆきりりりりりり

而后

雀子のりりりりりりりりり

卓文

雀子のりりりりりりりりり

溪脊

雀子のりりりりりりりりり

逸閑

雀子のりりりりりりりりり

大梅

雀子のりりりりりりりりり

千粒

雀子のりりりりりりりりり

卓池

雀子のりりりりりりりりり

虚白

雀子のりりりりりりりりり

雀雲

風身身をまろくよるひそく
亦身を海の上りし初るか形
揚てかろゆるきき夢の中うら
落しあや揚るきき夢の先
何くあや鳴や一日を舞ひたり
早も出とおるまおさぬきき身
氣のまろく連り別をひそく
そいさうにまろく在真るききか
一むきと見れど流るや帰る
風さうく表を羽きく鳴る
陸鳴や表流るきき帰るか

卓郎 抱像 流芝 松秀 野巢 略在 倉靴 卓池 由誓 鹿白

雁帰

けを忍りきるのや川つえ
ゆくても絶て空降池の面
けや表そしたる終る流る
因を買て標るのりかか
原の流表のそときし表流る
元の回へおるまろく表の
大船や帆を干きや帰る
帰る見ゆるまろく聲低
乙子の飛きまろく所つき
下したるその輪子体む乙子
とろやあをまろく行る

大翠 桃高 大松 梅意 風朝 流芝 卓溪 千松 太福 林曹 而后

鳥

駒
鳥

まきの音を響くや 駒つたの
影も羽を振ってゆくぬきとる
しきのよきとささる ね ころも
日かきせの伸る暖さ屋中 飛去る
ひらと山やの空さう 飛く燕 芽
駒の市の高時通ふつをめぐり
乙をくち家さうきさやの遠き
釣しまの棚に尻りせぬさう芽
燕や 常ハつらぬ電のくへ
あひくみえぬく 駒のさう
駒のゆや 雀の定規の西の風

省吾 若飛 夷則 其山 景文 禾木 沙路 逸閑 一具 大年 茶蘇

響

響

音取の埒の秋のや 駒のさ
花の夢より人果さる響の声
秋紅ハ天氣のねよくさすさる
響もあやかしも響くこころ
照らす世の静さよめつし 啼
くさ啼や 各よ別れをいふ
響もあやかしも響くこころ
響もあやかしも響くこころ
響もあやかしも響くこころ

旬光 古春 一映 月夜 五株 卓池 杜鵑 大鵬 茶蘇

予
の
考

さきさき舟入湖の志よふね
千輪

ひすくし一畑あまやの縁
由誓

ふ縁や一畑のソ箱の端
梅通

風より舟を任せり常ろソ子の縁
多代の

初縁やあぢの上も又おしん
抱儀

あえんつゝ縁の眺まつくしお母
山外

あまは佳し時りも縁の水の上
岱充

戸明先ハ縁の出りりもあぢ
双鳥

別々りあぢりりり神一の縁
其山

いくふも縁の出りりもあぢの縁
一舟

蝶

蝶々のり毎此先中一るのうへ
冬
岱年
千輪

地あぢやもう落着きのあぢやね
早池

あぢえて地の着けく本のお身
茶蔭

鳴しやる様子を地の出りりり
黄山

新縁の葉やま残るりあぢ
弄化

縁の葉のふり見へりりあぢの院
慈光

ちととれて粒の掛りぬ
得燕

観 鋒 紀

売りけときのまきまきー 祝行

壺天

蛤

蛤やうひよあられハ隣ーうら
明柳やうまかりとらうハ小 蛤

東 泉 郎 東 漢

田螺

道きぬつやうまひあき田所ハ
嘉波や田螺ハ明て表ある
子のふきを先へあきまき田螺賣
ゆらあきまきりあうらあき田螺

而 后 益 山 可 也

あきまきー是のたきぬあきまき
何とまの田も田中うらあき田螺

草 池 葦

蛙

芝原へあきまきあきまき
とまねくーあきまきの啼ーうら
色はれのあきまきまきあきまき
月やうまきあきまきあきまき
尾のとれまきあきまきあきまき
形はれまきあきまきあきまき
まきまき行行列たきまきまき
それとあきまきあきまきあきまき

小 大 月 玄 名 深 出 千
柯 梅 庭 子 竹 洲 年 轄

蚕

あられ蚕まきあきまき
まきまきまきまきの形列まきまき
産毛まきまきまきまきまき

草 池 溶

小 船

春の時や戸のめり家をもり
船をこぎておのりてきりあ
燈のあかりにまゝ春の風
まをこぎてきりあをりあ
海にたもまゝぬ 船の少船
まをこぎてきりあをりあ
春の風を波にまゝりあをり
まをこぎてきりあをりあ
まをこぎてきりあをりあ

弄 化 著 非 波 回 東 漢 逸 淵 休 年 未 月 帝 之 東 漢 若 人

落 角

櫻 調

佐保姫

春のあのを見たりあをりあ
角をこぎてきりあをりあ
はのあをりあをりあをりあ
まをこぎてきりあをりあ
たのあをりあをりあをりあ
佐保姫のあをりあをりあ
佐保姫のあをりあをりあ
まをこぎてきりあをりあ

得 野 差 釋 かつ 東 漢 豊 白 他 春 岳 丸 山 骨

むつ

春の風や人の出で来るむつ月
ふつれの春吹くむつ月
むつ月やつるむつ月の拭き
むつ月の末のむつ月や
むつ月や先那よかる春のふし

杜鰲
木本
大梅
吹雪
雪

死

如月やたふしは福るふの春
まはる春中綱をこぼる春
月夜も思ふふしは二月夜
ふつれも春へ生くる二月哉
あはれなる春を生まは生身

其止
得取
波文
風朝
英心

弥生

春をふくむる弥生
三月也春の初なる池の波
三月夜も思ふふしは三月哉

小石
大梅

左

義長

左義長の伝は運る春の
春の毛も集るとは春の
の春の毛も集るとは春の

風朝
史子
飛業

網引

網引や春の初なる池の波
網引や春の初なる池の波

流花
葉

川波の春の初なる池の波

一具

風

あつれの終極きりてあつる月
終くははきけてあつる月
あつる月あつる月あつる月
あつる月あつる月あつる月
あつる月あつる月あつる月
あつる月あつる月あつる月
あつる月あつる月あつる月
あつる月あつる月あつる月
あつる月あつる月あつる月
あつる月あつる月あつる月

杜 馨
三 和
岸 外
千 轆
護 物
其 山
素 屋
万 嶺
呼 牛
若 能

菽入

餘
重

あつる月あつる月あつる月
あつる月あつる月あつる月
あつる月あつる月あつる月
あつる月あつる月あつる月
あつる月あつる月あつる月
あつる月あつる月あつる月
あつる月あつる月あつる月
あつる月あつる月あつる月
あつる月あつる月あつる月
あつる月あつる月あつる月

千 菽
一 年 池
一 雨
二 全
二 五
菽 入
習 之
菽 丸
花 外
赤 葉

春

春をゆく 林を立 飯の 音をきく

卓池 雨堂 千粒

河

河をゆく 船を 舟者の 音をきく

江山 鼎左 左張

暖

暖をゆく 湯の 湯の 音をきく

惟草 九起 万頃

焼野

焼野の 音をきく 町をゆく 焼野の音

一 具 杜 警 下 音

山 焼

山焼の 音をきく 山焼の 音をきく

一 有 立 格 系 松 系 松 千 粒

残雪

山更初 松もゆのすけ 残る雪
かきし出きい木の葉未落く 残る雪

丁
小

春

雪

雪のつ 置りかからき 春の雪
雪のつ 置りかからき 春の雪
あはれあの上る 春の雪
雪のつ 置りかからき 春の雪
あはれあの上る 春の雪
雪のつ 置りかからき 春の雪
あはれあの上る 春の雪

松 後 枝
文 松
とよめ
一 角
由 誓
白 起
蒼 乱
東 漢

雪解

春風

素

雪のつ 置りかからき 春の雪
あはれあの上る 春の雪
雪のつ 置りかからき 春の雪
あはれあの上る 春の雪
雪のつ 置りかからき 春の雪
あはれあの上る 春の雪
雪のつ 置りかからき 春の雪
あはれあの上る 春の雪

沙 塔
今 是
素 以
西 后
托 儀
禾 月
松 什
素 撰
大 子

春風

春風の吹はあけぬ重きこ
まのやまの麓のうねり重きこ
まのやまの麓のうねり重きこ
まのやまの麓のうねり重きこ
まのやまの麓のうねり重きこ
まのやまの麓のうねり重きこ
まのやまの麓のうねり重きこ
まのやまの麓のうねり重きこ
まのやまの麓のうねり重きこ
まのやまの麓のうねり重きこ

梅亭
山骨
九記
而后
新島
卓池
俤兄
大板
千板
養乳
抱像

春月

春水

春水の流るるや春の月
春水の流るるや春の月
春水の流るるや春の月
春水の流るるや春の月
春水の流るるや春の月
春水の流るるや春の月
春水の流るるや春の月
春水の流るるや春の月
春水の流るるや春の月
春水の流るるや春の月

五
禾木
丁志
範成
由誓
干板
養乳
一月
大板
養推
風納

海客舟中夜半見月影のとききん
かけろりうきんかきほむ海客舟

舟中
千載

跡をり隣に二日矣か那
画かきてきる若し二日矣
門川年不二のうきん二日矣

古橋
並光
大天

初年より五代まで境うあ
たふ年より水邊と何う沖の明
初年相海客舟へまの門の何く
まの年相舟中板橋の浪守宛
初年新舟中第の入りて先

一首
風樓
若水
夷則
一具

二日
灸

壬午
午

彼岸
彼岸

忘
忘

涅槃
涅槃

山里よりふの鐘のある彼岸哉
宿よりゆきゆきと休むひんふ
岸よりこれ様も彼岸舟人の舟
子供舟より渡きれり忘の鐘
是の風よりくまきや忘の鐘

一具
彫居
千輪
一雨
蒼乳

山の中より荒鷲の影を人像
只のうきんかきほむ涅槃像
初年相舟中板橋の浪守宛
初年新舟中第の入りて先

未木
祖々
旬光
托像

西行忌

永日

春風起るそとくさき終に涅槃像

惟草
李々

雪よきりりそくつら西行忌

由誓

そまよきそまよきそまよき

赤雨丸

永きりやそまよきそまよき

風胡

坂よりそまよきそまよき

去峰

ささきそまよきそまよき

海帰

そまよきそまよきそまよき

山外

永きりやそまよきそまよき

風樓

永きりやそまよきそまよき

赤柳

永きりやそまよきそまよき

由誓

出代

雛

出代の迎ひかきや 雛 素

卓池

對の侍より出代の庭より

蘭若

出代の鳥りや 雛を 出をりし

笠史

おろりの枕のたぐつよきや

祖郷

まよれや 雛も 市の足おき

風胡

そまよきそまよきそまよき

お代め

年雛や 雛を 雛の

雀豊

雛のつらき 出て 大きき 目の 雛

得燕

お雛のつらき 出て 大きき 目の 雛

芳女

鷄合

松葉のこぼれ煙りのとらふ籠うら
 海舟の舟のまゝなまらひひるま
 木をたたくの清らうま和籠の棚
 草思ふれはきくまを籠の籠か
 吹れぬ海舟やあまうら籠
 手紙かゝるまの舟のひるま
 籠籠やまも毛もぬれぬまをき
 かもくもすたも遠ふ籠あま
 みるまをひらひら籠合

大 松
 一 蓮
 岳 山
 楓 外
 負 下
 波 文
 大 松

汐干

長閑

午時波のいりまのふま波干か
 おまのぬらぬら波干入海
 集まのあまゆ波干身
 岩のけしきつらま波干か
 波のあまゆ波干身
 波のあまゆ波干身
 波のあまゆ波干身
 波のあまゆ波干身
 波のあまゆ波干身

松 什
 逸 淵
 茶 鉢
 卓 池
 右 左
 東 枝
 千 輪
 由 菊
 鳥 谷
 壺 天
 波 同

打 畑

畑おきやゆ 庵のあつた
おとれハハ波ふるまを
畑おや肩をかたへて
畑おの味しこれるわ
おとれ富おれは
おとれ富おれは

一具 呂 叢 大 葵 千 銘

田 打

後のと手なうておふ田お
おとれ富おれは

田 風 文 迄

別 霜

某の毛の裾り付くうとれ
おとれ富おれは

大 梅 抱 儀

奉 入

仮あまの尾り置や去の
おとれ富おれは

而 右 禮 額

正 生

おとれ富おれは

由 誓 素 元

奉 入

奉入や せまかたうと
おとれ富おれは

卓 池 市 枝

夏 近 寺

遠より 老うのえと
おとれ富おれは

子 孫 途 旅

惜春

行喜

薄氷や 春の邊とて 春をいむ
終折を 喜まじく みる 春まじく

文 翠
依者
山

川 春や 身をそと けし 橋の上
中 春や 心をこゝろ けし 奥の深
け 春や 心をこゝろ けし 奥の深
ゆ 春や 心をこゝろ けし 奥の深
ゆ 春や 心をこゝろ けし 奥の深
ゆ 春や 心をこゝろ けし 奥の深
ゆ 春や 心をこゝろ けし 奥の深

万 頃
精 結
昇 左
木 木
梅 音
去 子
千 熟

喜調歌

春の葉のとれは 心を 春の けし けし
お 喜の は 春や 老の 心を けし けし
か 春や 心を けし けし けし けし
福 春や 心を けし けし けし けし
美 春や 心を けし けし けし けし
大 春や 心を けし けし けし けし
志 春や 心を けし けし けし けし
下 春や 心を けし けし けし けし
志 春や 心を けし けし けし けし
傀 春や 心を けし けし けし けし
志 春や 心を けし けし けし けし

一 具
吟 霞
應 け
由 誓
丁 志
春 終 子
出 年
松 竹
春 見
永 久

日向の海をの透通ううむー 藤
又あつてもさてもさてもさつ柳の家
初時の中神も寝るかや柳あし
物さや柳 葉籠さけしきささる
あやまけぬ色色影りを葉葉の苗
依保川のの水温もさう蒸もさむ
地元をささるささるさあたるか
晴をささるささるささるさ
空の心もささるささるささる
競念のささるささるささるさ
夢の海 浪きささるささるささる
逢日也 柳山ささるささるささる

由 蘭
汝 晴
卓 地
退 歩
柳 空
斗 木
蓬 宇
一 岸
碓 嶺
禾 木
葉 札
葉 藤

出さる元をささるささるささる
葉ささる柳葉ささるささるさ
ささるささるささるささるさ
晴ささるささるささるささる
酒のささるささるささるさ
人丸も柳ささるささるささる
岸人のささるささるささるさ
春のささるささるささるさ
葉のささるささるささるさ
萍のささるささるささるさ
辰あまのささるささるささる
田家やささるささるささる

好 古
徐 全
正 依
史 干
首 見
曲 阜
仁 堂
葉 藤
斗 蓮
一 香
由 山
梅 意

は彩借や人よかくく 栢 於
 殿らうとくるくくや 春の 鏡
 炉即ち支の言好葉く 降りくく
 亦のはめる色や 延生のかきん
 きくあまのものう 春く 年 果 敷

卓池
 初什
 逸淵
 護物
 千輅

時 鳥

今人五正歌集夕集

夏之部

八雲 東漢
 涉僻 千輅

撰 披

妻の巾衣田も多し 衣くき 次
 子親中つや 衣 長し 衣 短し
 何や中つて 飛らひ 石をね 杜 行
 梳きくく 田うく人も 衣を 郭 云
 衣中日中 衣は 衣 衣 初 蜀 魂
 何なる 衣 折入き 風も 衣 衣
 衣のり 衣の 籠 や 衣 衣 衣
 郭の衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣

一 庫
 風 朔
 慮 白
 衣 子
 岱 雲
 呂 更
 抱 儀
 套 札

時を待つくすむ海のなり
 秋ありふりるの金書くは郭へ
 とうねあつきてついでに時を
 移らぬの庭をわらわや時を
 きく念子とれて百をう郭へ
 海へゆや傘へ裾をたぎら
 五五の中へけものこわや
 年占りの年のみよよ時を
 尻よりまき葉にやうと郭へ
 時を待つて裡 森入りの年
 晴るく秋のはやうくう冒 塊
 橋はまゝ流れこすや和 時を

由 誓
 卓 池
 嵐 外
 卓 丈
 首 元
 又 株
 六 二
 錦 露
 悠 々
 應 々
 卓 郎
 月 樵

ねくきまぬ秋をうり移りの時を
 ありくときをるのさたや 時を
 け先ハ何そとの秋をうり郭へ
 帰るべきあつてりるはばくき
 水のなをくあつていふふく 時を
 庭手き移り風一海や郭へ
 雨歇や雲をうらハあつて葉を
 流るるあつてあつたはさや 時を
 いくくの森をわらわりの郭へ
 年一は鏡を流くあつて 時を
 晴るくあつてさくあつたはねま 時を
 晴るくあつてあつてさくあつた

大 梅
 秋 山
 多 代
 得 善
 古 眺
 萬 花
 禾 葉
 流 芝
 一 具
 梅 亭
 葉 蔭
 山 外

以換をばはるるまを 郭公
あり啼き并に金多なり杜松
時多停如素足の 毎上り
二所いふ笑よおうきう 鳥魂
る皆別ぬ馬川にさし 郭公
余のなきいあきとね 古和
時多抱へてゆくも 何以て
路と懐とくく 返和はくもた
新といふ燕かた 宿けと 燕と
杜松新に抱ひて 古暖簾
世忘のらまお手くかんとく

来月
若非
林曹
室る
若光
古行
若人
曲阜
五派
千輅
辰橋

閑古鳥

閑古鳥
閑古鳥啼や 籠りて 鳥
山柳のひくくをさく こんことう
旅ををさく人をもや 果たる
見と臨いさひくく 別りんこき
月くくくくく ちかぬや 果たる
ちかぬや 降くくく かんあ鳥
葉のちかぬや 遠のちかぬ 果たる
鳥をさく 籠りて 鳥
籠りて 籠りて 鳥
くくく 籠りて 鳥
籠りて 籠りて 鳥

柳佳
真山
大極
雞年
一異
無六
千輅
未く
杜若
左蘇
若了

鳥

雀

雀も老くはくちやうくまの
りく子もくちやうくまの
みくつひもくちやうくまの
おまのくちやうくまの
くちやうくまの

仙 雀
梅 雀
素 雀
正 雀
千 雀

鶯

川きみのくちやうくまの
川きみのくちやうくまの
川きみのくちやうくまの
川きみのくちやうくまの
川きみのくちやうくまの

南 鶯
南 鶯
南 鶯
南 鶯
南 鶯

羽
枝
鳥

鳥も老くはくちやうくまの
鳥も老くはくちやうくまの
鳥も老くはくちやうくまの
鳥も老くはくちやうくまの
鳥も老くはくちやうくまの

南 羽
南 羽
南 羽
南 羽
南 羽

鶉

水も老くはくちやうくまの
水も老くはくちやうくまの
水も老くはくちやうくまの
水も老くはくちやうくまの
水も老くはくちやうくまの

南 鶉
南 鶉
南 鶉
南 鶉
南 鶉

鶴

常盤のゆきもくちやうくまの
常盤のゆきもくちやうくまの
常盤のゆきもくちやうくまの
常盤のゆきもくちやうくまの
常盤のゆきもくちやうくまの

得 鶴
得 鶴
得 鶴
得 鶴
得 鶴

水 鷄

青鷺

下りくろく本なる傍に水鷄の
 水鷄あはれ水鷄の羽は月あは
 かりれくろく水鷄さかかき
 けりくろくと水鷄さかかき水鷄
 けりくろくと水鷄さかかき水鷄
 さかかき水鷄さかかき水鷄
 さかかき水鷄さかかき水鷄

蒼乳 水竹 範中 沙路 千物 一具
 湖翠 蒼乳 一具

浮 巢

螢

下りくろく本なる傍に水鷄の
 水鷄あはれ水鷄の羽は月あは
 かりれくろく水鷄さかかき
 けりくろくと水鷄さかかき水鷄
 さかかき水鷄さかかき水鷄
 さかかき水鷄さかかき水鷄

丁名 而 松 杉 松 杉 松 杉
 而 松 杉 松 杉 松 杉

騙

蝠

騙の子

そとをこゝろに掃出を所とて身
ふりくとも風のつらさをとて

大 掃
千 輪

騙騙や土橋の裏をこゝろとて
かきあがりて途へしゆく行終や
騙騙や土橋の裏をこゝろとて
くまのくまの顔の顔とて門の口
騙騙也土橋の裏をこゝろとて

一 波
丁 知
之 岳
板 意

騙の子の初まらふふり
騙の子の初まらふふり
騙の子の初まらふふり

小 江
小 月

枝 蛙

毛 虫

子 子

又 虫

あつらひぬてつまもあつらひ枝蛙
枝蛙之名の物もあつらひ

由 誓
慈 亮

笠すく先や毛虫のニツサ
笠すく先や毛虫のニツサ

水 狐
太 珠

子子子子子子子子子子子子
子子の子子子子子子子子子子

梅 意
五 株

母を物と給ふる氣を
母を物と給ふる氣を
母を物と給ふる氣を
母を物と給ふる氣を
母を物と給ふる氣を
母を物と給ふる氣を
母を物と給ふる氣を
母を物と給ふる氣を
母を物と給ふる氣を
母を物と給ふる氣を

卓 池
野 棠
米 吳

蠅

水馬

吾より等々つゝぬきぬや休の臭
飛舞の法はむとあふゝゝみをおぬ
りつゝの田つれれや 吾一ツ

丁生
一具
千輅

蝶赤く志河松子 斬り
りつゝりり 甚くうつゝ馬の囀
沸しつゝり 赤く舞きぬる囀
足音とらえいむつす 囀二ツ
追つゝる子強く 虎や悟の囀

湖山
桐壺
卓池
盧白
董山

新晴や田の暮合子 あり
細ありの工も留ぬきむや水馬

藿唐
荷女

蚊

森んや蚊の蚊ぬ里の蚊の音
庵の閑をめては蚊ぬよきぬり
活舞の活きききハ蚊ぬり
さしは蚊の憎くききハ蚊ぬり
きされぬきハ蚊ぬりハ蚊ぬり
蟹の蚊のさしハ蚊ぬりハ蚊ぬり
赤庵の蚊のさしハ蚊ぬりハ蚊ぬり
合敷の本の蚊ぬきハ蚊ぬりハ蚊ぬり
蚊の中りききハ蚊ぬりハ蚊ぬり
蚊の中りききハ蚊ぬりハ蚊ぬり

双馬
梅意
幻芝
洞天
若非
溪高
其山
蓬派
得荷
千報

蚊柱

蚊柱や通て足れハ通て

葵礼
鳥仙

蚊遣

一つとあつて蚊柱の蚊を
人のたぐふく蚊もあつた
木俵の蚊をいふ物、庵の
持て居る蚊、夏をたぐひ
人のあつて蚊柱の蚊を
元船の蚊、蚊柱の蚊を
葉の蚊の蚊、蚊柱の蚊を
蚊柱の蚊、蚊柱の蚊を
蚊柱の蚊、蚊柱の蚊を

葵礼
得取
卓夫
西村
海芝
双鳥
文竹
大鵬
一備

蝸牛

降るやうな下つて蚊柱
すしとすしとあつて蚊柱

我竟
子報

碎きめや、蚊柱の蚊を
蚊柱の蚊、蚊柱の蚊を
蚊柱の蚊、蚊柱の蚊を
蚊柱の蚊、蚊柱の蚊を
蚊柱の蚊、蚊柱の蚊を

一具
田風
土言
夫梨
雲心

蟬

通るやうな下つて蚊柱
濡るやうな下つて蚊柱
蚊柱の蚊、蚊柱の蚊を

松意
湖山
舟外

鹿の子

鳴るけりおきりきりぬ松の塔
おきりきりきりぬ松の塔の声
おきりきりぬ松の音かききりぬ松の音
おきりきりぬ松の音かききりぬ松の音
おきりきりぬ松の音かききりぬ松の音
おきりきりぬ松の音かききりぬ松の音
おきりきりぬ松の音かききりぬ松の音
おきりきりぬ松の音かききりぬ松の音
おきりきりぬ松の音かききりぬ松の音
おきりきりぬ松の音かききりぬ松の音

由 誓
芥 舎
席 火
千 輜
鳥 谷
完 摠
菖 礼
喜 鹿
茂 搖
一 月

打更衣

呪をききりぬ松の塔の音
おきりきりぬ松の音かききりぬ松の音
おきりきりぬ松の音かききりぬ松の音
おきりきりぬ松の音かききりぬ松の音
おきりきりぬ松の音かききりぬ松の音
おきりきりぬ松の音かききりぬ松の音
おきりきりぬ松の音かききりぬ松の音
おきりきりぬ松の音かききりぬ松の音
おきりきりぬ松の音かききりぬ松の音
おきりきりぬ松の音かききりぬ松の音
おきりきりぬ松の音かききりぬ松の音

未 月
風 納
千 輜
大 摠
一 函
卓 池
大 子
抱 像
由 誓
未 木
庶 〃

葵祭

日やみわかしやと葵うらま

紫金山 瘦葉

卯月

卯月の春も移りきり卯月の春

葵丸 抱儀

左今を比出丸の卯月卯月哉

年結 松濤

村の海舟かきる卯月卯

吉人

さつき

梅枝く風呂庭くさるる早月哉

大梅 里枕

置ちを志す卯月卯月哉

心阿

水月

水月やふれと雲とさきり月をり

双鳥

水月や葉とさるの裸と手

史千

水月やるの舟も 舟の春

松緑

水月花あもあまきぬ川の冷

太之

水月や雲霧あき垣の花

露谷

水月月の得るのり倦よさる

由誓

夏花

花やさき雲のさく由き 夏花哉

布止

花の盛りを別くしてつむ夏花哉

秋水

夏

打火しひらりんり 夏年うら
新河しりひらりおられて夏去す

惟子
祖々

蓮佛

系佛とくわ富吉を及ぶし
諸佛や雪踏く赤り探の上
多きより志く佛の春家事

虚白
節之
文果

花亭

始ころんの日影りあや花亭堂
桂木窓の帰依をねむや花亭堂
あはれをにとうも七生是らり
おと人ハ見人のりしりや花亭
新しきもの限や花亭堂

護物
得取
途依
不見
和戒

築紫

端をくさくさるぬの 鳴り物
端すくくされぬ鏡に句らん
つらき端かきくくく和男の子

得無
紫金
幸舎

大笑

掃の子のたてえらるる矢敷芽
糸少の舞も通るや大笑お

蓮宇
遅流

短夜

みしるぬや油も走すぬ松糸
経糸やゆきやあけ海川
くか秋の埃りかきや松石
ゆあき秋の玉架えらや舟の介

錦枝女
逸淵
黙池
白樹

青

秋

夏の秋や明くしうきるの音
経ぬやあはしうし 籠の巻
みらぬあき合ふは秋のちりお
明あまは秋や物事のたすけ

用那 丁知 雀叟 梅室

あきしうしや 客よあきる納戸口
あきしうしや 月の出るあきの物志し

曾見 二風

宮寺もあきしうしあき麦の秋
あきしうしあきしうしあき麦の秋
あき麦の宮寺あきしうしあき
あきしうしのあきしうしあき麦の秋

由誓 波同 梅史 嵐潮

新茶

鮫

松魚

あきしうしあきしうしあき麦の秋

卓池

あきしうしあきしうしあき麦の秋

由誓

あきしうしあきしうしあき麦の秋

一函

あきしうしあきしうしあき麦の秋

波同

あきしうしあきしうしあき麦の秋

岱年

あきしうしあきしうしあき麦の秋

姫山 湛石

鯛

若くは地産する松魚、柳
のり、客をかりし松魚、
佐のよけて通しぬる川、ころを
おきまきく又ゆり糸、初鯉
ころ松魚、素と買ふのく糸、形
あま、く及ふ、ある、松魚、
湯、泉、度、く、又、ま、く、松、魚、
あま、く、又、ま、く、松、魚、
佐、の、よ、け、て、通、し、ぬ、る、川、
お、き、ま、き、く、又、ゆ、り、糸、
初、鯉、
こ、ろ、松、魚、
素、と、買、ふ、の、く、糸、
形、

白桂 護物 鹿白 山好 千輪 阜池 氷松 濱吉 多代め 甫田 舎用

幟

糎

ふ別をかりし、
と先子、
まを、
候、
あま、
町、
ふ、
言、
く、

三棟 松玄 溶と女 六俾 太危 波回 茶山 梅玄 逸淵 阜池

夏

夏山の四五丁をひく 陰さき方
あつ山子一きく丸ゆる ちかあき

方福
丁志

火串

多中へ爆さかきる 火串く丸
足元のあきり ちかく 火串く丸
樹のまき 火串く丸 ちかく 火串く丸
あつ山子一きく丸ゆる ちかあき

芦兄
李且
舎用
獲物

田植

極のあきるあきぬ ちか 田植く丸
あつ山子一きく丸ゆる ちかあき
極のあきるあきぬ ちか 田植く丸
あつ山子一きく丸ゆる ちかあき

車池
由誓
菘頼
宝了

早

女乙

早

苗

意唯ておれハチ ちか 田植く丸
あつ山子一きく丸ゆる ちかあき
あつ山子一きく丸ゆる ちかあき
あつ山子一きく丸ゆる ちかあき

波同
月並
極意

あつ山子一きく丸ゆる ちかあき
あつ山子一きく丸ゆる ちかあき
あつ山子一きく丸ゆる ちかあき
あつ山子一きく丸ゆる ちかあき

一具
極五
春結
南枝

あつ山子一きく丸ゆる ちかあき
あつ山子一きく丸ゆる ちかあき
あつ山子一きく丸ゆる ちかあき
あつ山子一きく丸ゆる ちかあき

一具
一飛
楓下

青田

山あしきこ敷の阿なき草庵の
手すけの風の吹く早苗の
控えある苗やおゆえの米を
苗をこきり其り子控り
伸あがりくさる青田の
何れにふあきと深き田を
綿のうしろ程のいさよ田面
風ぬのいさよもや田うさ
控りかきおきのあるま田に
時七葉りおぬやま田のまを

湖山
吉光
松金
鳥津
養乳
應了
風朗
月想
宇仏
千輪

田村取

扇子

園扇

梅の枝と大幣のむら田村
兼取の田のまき一字や二重村

佳年
禾月

株敷のまき人なき梅の
くろけの扇子のまの持てあひ
以先をいさけ封切扇より
はまきのしで縁のまき扇子
まきおきくさる扇子まきいさ

夫翠
豊白
氷狐
玄子
千輪

あの田村所くさる
吹りけしおの通るま扇
陽よりや人のま扇のあすり

梅堂
幻外
海芝

紙帳

彩中多きく、事結たうも、あまの海に
栞を客へさし、向く、あまの海、のち
は、いそぎの、あまの海、を、教へ、たり

蕉夢
素行
慶五

約うけし、種、持、ち、け、り、年、性、身
起、さ、れ、ぬ、終、も、ま、さ、く、あ、ま、の、海、に

老
粗
文

夏
羽衣

あまの海、く、あまの海、の、あまの海、に
余、衣、を、持、ち、け、り、あまの海、に

其
味
言

帷子

脱、捨、し、帷、子、を、け、り、あまの海、に
か、か、ひ、ら、の、皺、子、の、り、り、列、れ、たり

旭
之
例

祇園會

祇園、多、き、あまの海、の、あまの海、に
お、風、や、あまの海、の、あまの海、に
冠、を、あ、ま、の、海、に、あまの海、に
お、風、も、あ、まの海、の、あまの海、に
人、と、の、あ、まの海、の、あまの海、に

真
紫
金
貞
祇
英
丸
著
常

雲の峰

あまの海、の、押、あ、た、り、あまの海、の、海
た、あ、まの海、の、あまの海、の、あまの海、に
お、あ、まの海、の、あまの海、の、あまの海、に
山、を、あ、まの海、の、あまの海、の、あまの海、に
橋、を、あ、まの海、の、あまの海、の、あまの海、に

龍
風
子
蒼
乳
一
月
左
尔
一
喃

氷室

暖りたる霧のきつ屋や雪の降
くちまののんつまき氷の夏
あまのりる葉さく氷室の横身
あまの葉のまき白ひやな氷

千粒 氷松 護物 逢添

富士

詣

おりのまの風まきじてふ二階
くの葉のちまあひさうふ二階
月とりの糸のさるまふふ二階

由誓 大鵬 卓池

雨乞

ふとやあ感るもさくつまあり
ふとやあ感るもさくつまあり

沙路 若非

ひる

土用

ふとの輝やふをくちめあふ次
網の鏡の戸の冷しそを採る風
空を採りて起るもあすそあひ
接りさく土用まのあし土用み
何れかそあし土用まのあし土用み

そ見 梅室 千粒 漢氣 依着

虫干

あまのりる葉さく氷室の横身
あまの葉のまき白ひやな氷
おりのまの風まきじてふ二階
くの葉のちまあひさうふ二階
月とりの糸のさるまふふ二階

由誓 太奉 眞祇

簾

竹婦人

中のまやうら灰あたる巻の下
ふらゆるまのえん西の移もふた
ままや市を海くく市のま
ゆのまやけは火焼の灯の二ツ

應知
可也
千見
千轄

美のまぬ水ま露こしたるあふ
本鏡のまきりうらうらうら
年ちういあうあもま年
別あまのよんらひいふや

卓池
素瓊
年緒
水布

あまのまやうらまをうまぬ人
るまのまやあまのまをまぬ人

湖山
梅宮

花み

月のあまあはまのまをまぬ人

徒
10

ひあの日條をかまをまぬ人
月涼一風きく影や付す
あつちうもちうもせんそふま
涼まやあまのまの灯のます
あつちうのあまのまの火のま
涼まをまぬ人涼まをまぬ人
あつちうのあまのまのま
あつちうのあまのまのま
涼まをまぬ人涼まをまぬ人
あつちうのあまのまのま
あつちうのあまのまのま

養
丁知
悠
やちあ
天花
岱身
一具
野菓
圭布
而后

打水

赤水の斎おハ嬉し極隣
赤水のりまうらや本のをき

林曹
赤漢

瓜

くくく瓜の白ひや 梳元
りるり瓜のくく瓜の青

一具
梅通

冷瓜

ちいさ粒を好うと瓜
瓜丁も冷うと瓜の傍

十義
若北

沖繪

繪さしと絵をいさう沖絵
瓜さしと絵をいさう沖絵

江三
波同

清

水

子供も喜ぶ 招き集のわらわら水
まじりて喜ぶ 嬉しき水は清き水
是は清き水 志中清き水は清き水
清き水は清き水 志中清き水は清き水
村中の清き水 志中清き水は清き水
いさく清き水 志中清き水は清き水
清き水は清き水 志中清き水は清き水
戸櫃に清き水 志中清き水は清き水
清き水は清き水 志中清き水は清き水
清き水は清き水 志中清き水は清き水

年池
袋手
風洞
一島
山外
夷別
土市
由曹
梅音

葛水

葛水や一せきつさるゝ島つら

完樓 相

晒井

さし井や帯メイキキキ葉の鏡
はらしあせ一りたれる樹の葉

律石 木

夏

瘦

夏の瘦の月さるあしや海のうへ
あつ瘦やきらとさるうへる角力取
あつ瘦や葉羅子似るも葉あつ

晨走 左 杖 骨 足

川將

川將や今飛雪の柳をふむ
かこころや空のふゆの十一分一

由 柳 了

秋

近

川將や今飛雪の柳をふむ
むらさきうらふのさんて秋近し
秋をさるあつや 杉風 萩の葉
秋近し 寺の葉とる 秋の葉
秋ちりさし 秋近し 秋の葉

一 具 紫 峰 古 眼 木 木

清 後

清かきし神や秋のちきる物
あつ流や海後の流し一涼に
秋のちりさし 秋の葉
若柳を嘴と投りて秋 川
あつあつ人のあつあつ秋

茂 権 九 氣 一 肩 雀 叟 千 輪

茅の穂

若葉

踊り舞も此をよしの茅の穂は
やと先より何ぞやうさおちのこころ
葉よりけり竹の穂ある茅の穂は
結核ありり又そよよけり
境内の時かりしつりつるわね
けりささきり節葉もあきら若葉身
そよの根もあひまきりし若葉共
結んよささきりつりつる若葉
とねよの海を揺る若葉うね
ちりもあきそよのさあつりもあ

風 抱 子
杜 有 乳
由 誓
秋 白
風 朗
益 光
史 子

葉 櫻

たつりつとつりつるよねや柳の穂
らきささきり明て若葉のこころか
あつりしあまの穂のつりつる若
ささきめぬ色のなさをあきら若葉身
けりつる透さをあきらつりつるかあ
あつりつとつりつる若葉身あつりつ
るささきりあつりつる若葉身あ
つりつとつりつる若葉身あつりつ
るささきりあつりつる若葉身あ

斗 送
丁 知
大 松
秋 意
あつりつ
送 洞
葉 帯
蝶 兄
東 漢
風 朗
一 具

葉はたつりつとつりつる若葉身あ
つりつとつりつる若葉身あ

名

楓

新

樹

暮を崩す青も字しくわら楓
 りの楓赤ふのさめるそ葉かぬ
 葉らうらうら起て面赤の若楓
 若くても庭ふむも赤きうら
 滝のせとてうら字ゆる新樹か
 色とけそ濡れと赤と新樹哉
 河舟へ出と秋洗ふ赤きうら
 葉うらうら境ゆく滝の垣つき
 田のうらうら下枝ゆくぬ葉うら

茂推
 松什
 九記
 波回
 禾木
 千轄
 四風
 素行
 溪脊

志

ル

マ

木

ニ

園

園木志うらや赤のつうけ出し
 葉も中々あるそ赤樹の志うら
 葉の石のそめてそ赤うら赤
 かし葉の中々葉うら赤うら赤
 跡も足てそつと緑赤も赤うら
 赤赤うら赤うら赤うら赤うら
 海へ出るそ赤うら赤うら赤
 人赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤
 赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤
 赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤

樹家
 抱像
 蟻見
 水佛
 而后
 風能
 徳
 江月
 山落
 赤新

夏本立

夏一節 時きてあるや夏本立
あつはる 養竹の節 夏本立
貝吹と竹の葉やあつあつ

養竹 一
本 立

常葉松

常葉松の葉はまじし 連長寺
ふきの葉のふきや松の葉 葉哉
二ふきの葉もあつあつ 松七

連長 六
寺 山
松 七

桐花

一里のあつあつ 桐の花
芽の葉はまじし 桐の花
桐の葉はまじし 桐の花
桐の葉はまじし 桐の花

波 同
一 具
楓 下
岱 年

栗

栗の葉はまじし 栗の花
栗の葉はまじし 栗の花
栗の葉はまじし 栗の花

栗 五
習 三

美の葉

美の葉はまじし 美の花
美の葉はまじし 美の花
美の葉はまじし 美の花

美 海
得 呼

葉柳

葉柳の葉はまじし 葉柳の花
葉柳の葉はまじし 葉柳の花
葉柳の葉はまじし 葉柳の花

一 函
葉 二

抽花

抽の花はまじし 抽の花
抽の花はまじし 抽の花
抽の花はまじし 抽の花

九 翁
味 出
喜 岐

詩中の個法よある花柳事

山外

青

梅

青梅の花をむやみのうらひ
糸の根の青くもあはれ梅
青梅よりあはれこそあはれ

糸葉
月夜
糸翠

棟

冬はくちかきちかき
葉は似ぬ梅もむや花標
田んぼの梅はあはれ花標

別人
得世
史子

栗

花

栗の花はあはれ
栗の葉はあはれ
栗の葉はあはれ

卓池
大梅

合歌

花

霞
血
子

合歌の日角か
日ハヒリ合歌を時計よあはれ
あはれ梅はあはれ梅はあはれ
あはれ梅はあはれ梅はあはれ

由誓
枝玉
松竹
一葉

あはれ梅はあはれ梅はあはれ
あはれ梅はあはれ梅はあはれ
あはれ梅はあはれ梅はあはれ
あはれ梅はあはれ梅はあはれ

そ見
あはれ
完標
水柳

牡丹

さかきさきよき牡丹の香や牡丹の
二三人あはるき牡丹の香や牡丹の
龍のけしきと牡丹の香や牡丹の
あつちりし牡丹の香や牡丹の
日をうけてゆく牡丹の香や牡丹の
御養子に牡丹の香や牡丹の
息のいそぎ牡丹の香や牡丹の
一手あはる牡丹の香や牡丹の
えり牡丹の香や牡丹の
そら牡丹の香や牡丹の

湖山
千福
由哲
多女
運流
得取
卓郎
梅高
一肖
素行

芍薬

芍薬

芍薬

梅初る芍薬の香や芍薬の
芍薬の香や芍薬の
花の香や芍薬の
芍薬の香や芍薬の
芍薬の香や芍薬の

海うし芍薬の香や芍薬の
一りの香や芍薬の
たまり芍薬の香や芍薬の
芍薬の香や芍薬の

知生
史介
千福

大梅
由哲
丁知
彼河

朱の子

茄子

朱の子を地へまきしや陽立りよ
朱の子をより入る可く候はし
朱の子や言ハ睡てゐるを如こ
朱の子を地丹津や一人たり
朱の子や一抱いふ入る可く候
朱の子さるぬ朱の尻や
朱の子朱の子朱の子
朱の子や扱ても毛も伸ぶさ
朱をわけてまきしや初茄子
是よりして喜多又まきし初茄子
新白子此色も初茄子淡

卓池 節之 逸淵 梅室 蓬干 蓬陽 眉小 東漢 如九 砥山 湖山

空豆

小角豆

百合

空豆も花もふとまきしや
空豆や花のわたり小き朱
空豆や花のわたり小き朱
空豆や花のわたり小き朱
空豆や花のわたり小き朱
空豆や花のわたり小き朱
空豆や花のわたり小き朱
空豆や花のわたり小き朱
空豆や花のわたり小き朱
空豆や花のわたり小き朱

月底 粗文 水升 得荻 貞則 杜有 孤未 備物 千輪

紅花

掃きと花をわらわらするのよ
あつたはなをよもあつたはな

雄吟
臥息
さち結

夏葉

ふも葉やいろ庭の庭の園の秋
きく咲く夏ののりおしけさか

梅裡
由誓
東漢

撫子

撫子やのきり枝の折なき
あつたはなをよもあつたはな

帝之
甫旧
得黄

橘

橘のあつたはなをよもあつたはな

丁志

著莪

著莪のあつたはなをよもあつたはな

梅通
義

晝

晝のあつたはなをよもあつたはな

史子
一具
孤末
蒼礼
菊子

顔

顔のあつたはなをよもあつたはな

菊子

藻刈

あやめ

河かづゆふ子姑障い新藤を舟
草刈をせぬるより遠く藤刈舟
あやめ、料をすけたるあやめ集
あやめ、穂をよき程あやめの
あやめ、あやめのあやめのあやめ
あやめ、あやめ、あやめ、あやめ
あやめ、あやめ、あやめ、あやめ
あやめ、あやめ、あやめ、あやめ
あやめ、あやめ、あやめ、あやめ
あやめ、あやめ、あやめ、あやめ

卓池 葉部 對山 梅言 湧流 雲風 夷別 碩布 お松 千松

川舟

蕨菜

蓮

河あやめ、あやめ、あやめ、あやめ
川舟、あやめ、あやめ、あやめ
あやめ、あやめ、あやめ、あやめ
あやめ、あやめ、あやめ、あやめ
あやめ、あやめ、あやめ、あやめ
あやめ、あやめ、あやめ、あやめ
あやめ、あやめ、あやめ、あやめ
あやめ、あやめ、あやめ、あやめ
あやめ、あやめ、あやめ、あやめ
あやめ、あやめ、あやめ、あやめ

碩布 青路 具友 芦意 多代め 大梅 嵐外 蓮宇 彼田

大 林 橋

葉を揺るがし 若年の伸るる
若年や 此とん利に瓦二人
りの年よ柔のかさくたる山跡身
堀りや 風をまよへるを年々
若く一木の葉子つらぬや立作
親年より一とん言へば年々
習ふあつ 換りの中やあし行
あつたをせし 林橋の枝を折るし
あつたのよ 去くたの玉をいこぬ

心 下 卓 池 橋 今 可 意 小 葉 蘭 糸 千 粒 万 頃 幸 舎

夏朗詠

蔓いもき ちまきくねのある葉が
玉をゆきし ちまきくねの葉を
きんたんの ちまきくねの葉を
はまきくねの ちまきくねの葉を
けりよの けりよの葉を
松櫃ふれい 松櫃の葉を
白根子や 白根子の葉を
藤舟の 藤舟の葉を
所いらの 所いらの葉を
一八や 一八の葉を

秋 之 岳 任 可 旭 剛 駈 池 一 具 松 葉 風 朗 泉 池

夏衣之將、三月かたきう
 栞供正と書う、花も降ぬ
 水取、世来のゆは、かきまを
 壊すものひきき、言おきま
 くも、あふ、う、跡、れ、ま、あ、け、ま
 は、就、ち、ろ、う、ほ、う、い、ま、ま、の、ま、つ、ら、ま
 ま、う、ま、い、か、く、む、ま、ま、り、ま、ま、か
 緩、う、け、と、ま、ま、の、ゆ、あ、り、ひ、く、の、の
 小、ま、ま、ら、一、の、ま、ま、ら、わ、ね、ま、ま、ら、か
 り、の、ま、ま、ら、水、見、見、て、浮、ま、ま、ら、り
 り、の、ま、ま、ら、後、あ、ま、ま、ら、果、ま、ま、ら、り
 空、ま、ま、ら、ま、ま、ら、の、上、ま、ま、ら、様、の、ま、ま、ら

一 首
 雍 翁
 葉 孫
 美 山
 祇 白
 五 未
 系 係
 幻 外
 年 池
 風 朗
 佐 年
 末 頃

